家庭科教育における食生活のリスクに着目した授業構想の検討

Study on the risk management for food life in home economics education

山口智子，飯野由香利，中村和吉，高木幸子
Tomoko YAMAGUCHI, Yukari IINO, Kazuyoshi NAKAMURA, Sachiko TAKAGI

1．はじめに

リスク（risk）とは，日本語では危険，あるいは危険性，危険度と訳され，「人間の生命や健康・資産ならびにその環境に望ましくない結果をもたらす可能性」と定義される（奈良2011）。「現代社会はリスク社会である」とも言われており，われわれは日常の衣・食・住生活のいずれの場面においても，多種多様なリスクとともに生活を送っている。しかし，リスクはいつ起こるのか，どれくらいの起こりやすさで起こるか，どのくらいの大きさで起こるか，そもそも起こるのかさえも分からない不確実性をもっている。それゆえ，予防的な処置や施策，事前的なリスク軽減を行うべきであり，それが生活の安心・安全に繋がる。

食生活においては，栄養の過不足，疾病，食物アレルギー，食中毒，調理における事故やケガなど，ヒトの健康や生命に危険を及ぼす様々なリスクが潜在している（中谷2007）。食品の３大機能は，一次機能（栄養性），二次機能（嗜好性），三次機能（生体調節性）であるが，これらは食の安全性が確保された上で初めて機能するものである。しかし，どんなに栄養価が高く，美味しく，安全性に配慮して販売されている食品でも，100％安全でリスクゼロと言える食品は存在せず，われわれ消費者が食品の扱い方を間違えればリスクが発生する場合もある。したがって，リスクを回避し，健康で安全な食生活，そして快適なより良い暮らしを送るためには，リスクに対する正しい知識をもって対処する“リスクマネジメント能力”が必要である。

リスクマネジメントとは，「リスクとその悪影響を，計画的で効率的な資源の獲得や分配をもって小さくしようとすること」と定義され，具体的なリスクマネジメントプロセスは，第1段階：リスクの分析，第2段階：リスクの評価，第3段階：リスクの処理手段の選択，第4段階：リスク処理の実行，第5段階：リスクマネジメントの再評価である（奈良2011）。

著者らは，これまでに家庭科教員養成における教科専門と教科教育の連携を進めてきた（高木ら2013，2017）。その中で，専門教科として学んだ内容をもとに教材や授業を考え，指導計画を作成する過程で，教科専門の教員が専門知識をもとに助言するシステムを構築している。家庭科において生活の中のリスクに着目した授業を展開することは，児童・生徒のリスクマネジメント能力を養い，その中で先を見通して考える思考力や判断力，生きる力を育成することができると考えられる。そして，児童・生徒が主体的に生活の質（QOL）を守り，さらに向上させることに繋がると思われる。

以上のような背景から，リスクを教科専門内容から捉えてリスクマネジメントの観点から指導できる家庭科教員の養成を目指して，中等家庭科教育法において，日常生活におけるリスクに着目した講義を衣・食・住生活の3分野で実施した。その中から，本研究では食生活分野について，教員養成課程の学生の食生活におけるリスクの捉え方の実態を明らかにするとともに，中学生（あるいは高校生）に教えるための教材や授業を考え，授業計画を作成する授業構想の過程でみられた学生のリスクに対する考え方の変容と課題について報告する。

2017.6.23　受理

2．方法

(1) 講義全体の流れ

2016年10月～2017年2月に「中等家庭科教育法Ⅱ」の受講者11名（家庭科専修10名，生活科学課程1名）を対象に，日常生活におけるリスクに着目した講義を行った。講義全体の流れは，図1の通りである。

①リスク・リスクマネジメントの概要説明
↓
②リスクの列挙（衣・食・住生活の各分野1時間）
↓
③リスクの内容の分析（衣・食・住生活の各分野1時間）
↓
④教材・指導案・指導計画の作成（2時間）
↓
⑤実地指導講師の講義とアドバイス
↓
⑥教材・指導案・指導計画の発表
↓
⑦教材・指導案・指導計画の修正

図1　リスクを題材にした講義全体の流れ

(2) 食生活におけるリスクの検討

リスクマネジメントのプロセスに沿って，食生活におけるリスクの分析・評価等を行った。具体的に学生が行った作業は，次の通りである。

図1の②において，まずリスクを列挙し，各リスクの内容を考え，その情報源やリスクの分析方法を検討して記載した。また，食生活上のリスクについて「考えたことがあるか」,「経験したことがあるか」,「学習材料として取り上げることについてどう思うか」について調査用紙に記載した。

次に，図1の③において，列挙したリスクの中から1つを選択し，そのリスクについて分析・内容の検討を行い，構造分析（要因間の関係）および対策を含めて検討した。また，そのリスクを選択した理由，多角的・定量的・定性的な分析の意義，リスクマップについて調査用紙に記載した。

(3) 教材・指導案・指導計画の作成と発表

選択したリスクを題材に，中学校または高等学校の家庭科におけるリスクに着目した授業を構想し（図1の④），教材や指導案の作成と指導計画に関する発表を行った（図1の⑥）。授業を構想する中で，作業内容，授業内容，難しかった点，問題点等について記載した。また，指導案・指導計画の発表後には，受講者および教員から受けた指摘やアドバイスをもとに問題点や改善点等を振り返り，指導案の修正を行った（図1の⑦）。

(4) 調査用紙の集計・解析

学生が記載した調査用紙の集計・解析を行い，学生の食生活に関わるリスクの捉え方やリスクを題材とした授業構想での問題点，課題等について検討した。

3．結果

(1) 食生活のリスクの捉え方

学生が食生活におけるリスクと考えた項目を表1に示した。多くの学生が「栄養不足」,「生活習慣病」,「肥満」,「ケガ」,「誤飲」,「窒息」,「食中毒」,「異物混入」を挙げており，列挙したリスクの総数はのべ104件，1人当たり平均9.5件であった。これらのリスクを分類してみると，栄養に関連するリスク，食生活・生活習慣に関連するリスク，病気に関連するリスク，事故に関連するリスク，食品衛生に関連するリスク，消費生活に関連するリスク，環境・自然災害に関連するリスクの7項目に分類できた。この分類別では，病気に関連するリスクが最も多く，次いで事故に関連するリスクが多く挙げられていた。

(2) リスクの情報源と分析方法

学生が列挙したリスクの情報源とリスクの分析方法について，図2と3に示した。情報源として最も多かったのは「テレビ」であり，次いで「授業」,「経験した」の順であった（図2）。また，それらのリスクの分析方法としては，「定性的な分析」がもっとも多く，次いで「リスクの同定」,「定量的な分析」の順であった（図3）。

(3) リスクを考えることと経験

食生活上のリスクについて「考えたことがあるか」,「経験したことがあるか」について，学生の回答を表2に示した。食生活上のリスクを考えた経験については，「少し考えたことがある」が91％を占めていた。また，リスクの経験については，82％が「経験がある」と回答していた。その具体的な内容については，「栄養不足で風邪をひいた」,「幼児期にあめ玉を丸飲みした」,「手指を切った」,「やけど」,「胃もたれ」,「アレルギーによるアナフィラキシーショック」,「野菜不足による肌荒れ」,「食べた物が原因でお腹を壊した」であった。これらの具体的な内容は病気や事故に関連するものがほとんどであり，先に

表1　食生活において考えられるリスク

学　生	列挙したリスク	
	件　数	項　目
A	7	栄養不足，拒食・過食，糖質不足，誤飲，外食の増加，こ食，生活習慣病
B	9	火事，食あたり，異物混入，生活習慣病，誤飲，窒息，やけど，拒食症・過食症，ファーストフード
C	9	けがをする，食中毒（生魚・肉），食中毒（じゃがいも），窒息，異物混入（不衛生），生活習慣病，肥満，風邪を引く
D	9	肥満，栄養不足，生活習慣病，肌荒れ，食中毒，窒息，けがをする，異物混入，虫歯
E	11	窒息，誤飲，生活習慣病，栄養不足（妊娠時葉酸不足，Ca不足），アルコール依存症，飲酒，喫煙，被爆，地球温暖化，調理中のけが，火事
F	8	脂肪肝，肥満，拒食症，急性アルコール中毒，食中毒，喉のつまり，栄養失調，庖丁などでの切り傷
G	8	火災，調理器具，食材，物の落下，消費，食事，ダイエット，洗剤
H	10	中毒，アレルギー，依存症，生活習慣病，やけど，誤飲，食料不足，虫歯，胃痛・胃もたれ・二日酔い，外食
I	13	食物アレルギー，食中毒，製造元のミス，消費期限をまもらない，偏食，肥満，調理中の事故やケガ，テーブルマナーを知らない，ダイエット，おいしくない，調理前の身だしなみ，食品購入，食器
J	11	食中毒，ケガ，窒息，腹痛，肥満，拒食，栄養不足，悪臭，虫，麻痺，無駄
K	9	食中毒，調理中のケガ，肥満，栄養不足，飢餓，廃棄，食料自給率，災害，誤飲

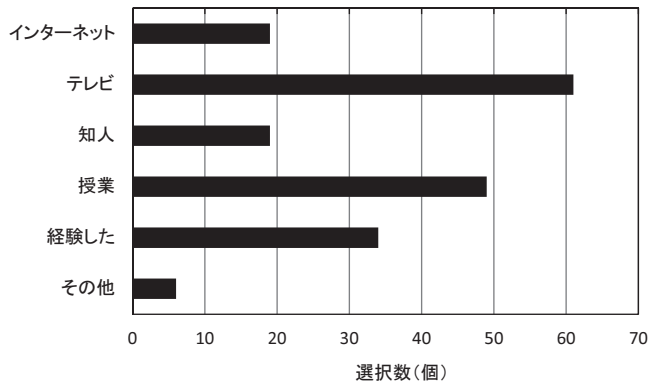


図2　リスクの情報源

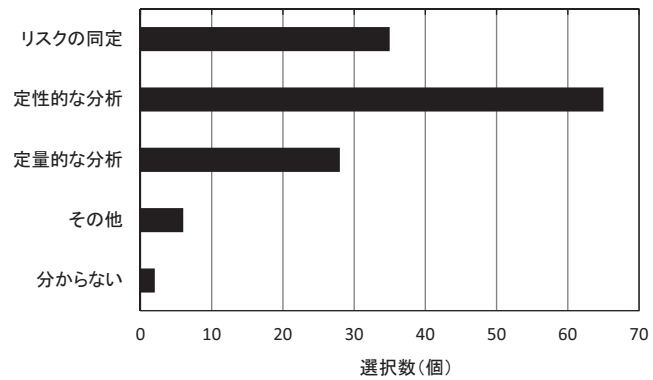


図3　リスクの分析方法

表2　リスクを考えた経験と経験

質問と回答項目	回答数	
	（人）	（%）
Q1. リスクを考えた経験		
たくさん考えたことがある	1	9.1
少し考えたことがある	10	90.9
ほとんど考えたことがない	0	0.0
全く考えたことがない	0	0.0
Q2. リスクの経験		
経験がある	9	81.8
経験がない	2	18.2

学生が列挙したリスク（表1）において，病気に関連するリスクが最も多く，次いで事故に関連するリスクが多く挙がっていたことと一致していた。

表3　選択した食生活におけるリスク

学　生	リスク内容
A	摂食障害（拒食症・過食症・低血糖症など）
B	拒食症・過食症・ダイエット
C	乱れた生活によって起こる生活習慣病について
D	生活習慣病
E	災害と食（災害による風評被害，災害時の食事）
F	アルコールが及ぼす様々な害
G	こ食
H	アルコール依存症とアルコールによる健康被害
I	食物アレルギーについて
J	食中毒
K	望ましくない食生活による肥満や栄養不足などの健康障害

表4 リスクの選択理由

回答項目	回答数*	
	（人）	（%）
リスクの内容をよく知っている	1	3.2
リスクを経験したことがある	5	16.1
自分が興味・関心がある	9	29.0
調べてみたい（対策を知りたい）	6	19.4
授業で取り上げるのに適した題材である	2	6.5
生徒がリスクと対策を知ることにより将来に役立つ	7	22.6
科学的な理解に繋がる授業をしやすい	0	0.0
アクティブ・ラーニングとして教えやすい	0	0.0
わからない	0	0.0
その他	1	3.2

*複数回答あり

(4) 選択したリスク内容

表1で列挙したリスクの中から，学生が指導案の作成にあたり１つ選択したリスク内容を表3に示した。また，これらのリスクを選択した理由を表4に示した。選択理由として最も多かったのは，「自分が興味・関心がある」の29%，次いで，「生徒がリスクと対策を知ることにより将来に役立つ」が23%，「調べてみたい（対策を知りたい）」が19%であった。表3の選択したリスク内容として，生活習慣病とアルコールに関するものが各2名から挙がっており，表4の選択理由からも，学生が指導案の作成において，教える対象の生徒の立場ではなく，大学生の自分自身の興味・関心を優先させて考えていたことが分かった。

(5) 授業構想の過程における学生の考え方の変容

これまでのリスクの分析を踏まえ，リスク内容として「摂食障害」を題材に取り上げた学生Ａの授業構想について，その過程における学生の考え方の変容をみていく。

授業構想の１回目において，中学2年生を対象とした授業として「摂食障害」を題材とし，「思春期・成長期に発症のリスクが高い問題であり，早めに知ることで改善の可能性が高いと考えた」こと，「特に，中学2年生は思春期真っ只中にある」とのことを学年想定の理由として挙げていた。しかし，授業構想2回目では，題材名を「食生活と健康（摂食障害）」と変更していた。そのねらいを「自分の食生活について，摂食障害から食事に必要なことを理解することで，振り返りと見直しができる」としている。授業構想1回目で，「摂食障害をメインにすると，生徒自身が障害の可能性があるのではないか，プライバシーを侵害してしまうのではないか」と考えたため，「自分の食生活を振り返り，食事を整える・見直すということをメインにして，摂食障害は例として取り上げることに変更した」と述べている。さらに，構想の過程で「学習指導要領に基づいて，ねらい・内容を決めたい」との記述や，生徒の反応やプライバシーなどを考えた生徒の立場からの視点が導入されていることが見受けら

れた。

(6) 指導案の作成とその変容

学生Aが実際に構想した授業について，当初作成した指導案と指導計画の発表後に受講者および教員から受けた指摘やアドバイスを加味して修正した指導案を図4に示した。また，作成した本時の学習指導過程の変容を表5に示した。図4および表5の下線部は修正箇所を示している。

修正前後の指導案を比較すると，本時の指導の前に栄養についての学習が加えられていた（図4）。中学校学習指導要領の「B食生活と自立」において，当初の指導案（修正前）はアのみの学習であったが，修正した指導案（修正後）ではイの栄養素についての学習も組み込まれており，(1)の食生活と栄養についての指導事項を満たす内容に修正されていた。学生A自身は，「この修正により食問題を多角的に考えるようになる」と考えるとともに，「生徒が自分の生活と重ねて考えたときに，摂食障害がメインになりがちだった学習を改善した」と述べている。また，本時において摂食障害を取り上げる際に，生徒のプライバシーの問題や過度な不安を引き起こす可能性を危惧していた点については，教員より教育用のDVDがあることのアドバイスを受け，視聴内容の変更と視聴時間の短縮を行っていた（表5）。

このように，摂食障害というリスクを題材に取り上げる中で，安全指導の面から，摂食障害のリスクのみに焦点をあてるのではなく，食生活の乱れが健康に被害をもたらすことを，摂食障害を知ることから生徒に理解させようとした指導案の作成に至った。学生A自身も「摂食障害を通して，食生活が日常生活の中で非常に重要であることが伝わる授業にしたい」と述べていた。

(7) 学習題材としてのリスク

授業構想と指導案の作成・修正を終えて，取り組んだ学生に対して，「リスクを学習題材として取り上げることについてどう思うか」について調査した結果を表6に示した。「家庭科の題材として適当である」が39%，「考えやすい」が35%，「取り組みやすい」が27%であった。リスクを考えたり，実際にリスクを経験したことがある学生が多かったことからも（表2），家庭科の学習題材として食生活上のリスクを取り上げることは考えやすく，取り組

表5　学生Aが作成した本時の学習指導過程の変容

学習内容	生徒の学びの姿	
	修正前	修正後
1．導入 食問題について考える	前回考えた食問題を班ごとに共有する。（ワークシートに記入）	前回考えた食問題を班ごとに共有する。（ワークシートに記入）
	共有した食問題を班ごとに発表することで，自分で気付かなかった食問題を知ることができる。	共有した食問題を班ごとに発表することで，自分で気付かなかった食問題を知ることができる。
2．展開1 摂食障害について	拒食症・過食症を経験した人のドキュメンタリーDVD を見て，摂食障害について考える。 （15 分）	拒食症・過食症を経験した人のドキュメンタリーDVD を見て，摂食障害について考える。 （教育用 10 分）
	考えたことをワークシートにまとめることができる。	考えたことをワークシートにまとめることができる。
3．展開2 問題点と改善策を考える	DVD の主人公の生活の問題点と改善策を考え，ワークシートに記入する。	DVD の主人公の生活の問題点と改善策を考え，ワークシートに記入する。
4．まとめ	食生活において大切だと思うことを考える。 次回の学習内容を知る。	DVD や食問題の学習を踏まえ，食生活において大切だと思うことを考える。 次回の学習内容を知る。

修正前

1. 題材名

「自分の食生活をよりよいものにしよう」

―身近に潜む食問題の理解と自分の食生活の改善―

B「食生活と自立」

(1)中学生の食生活と栄養

ア．自分の食生活に関心を持ち、生活の中で食事が果たす役割を理解し、健康に良い食習慣について考えること。

2. 題材の指導目標

自分の食生活の振り返りと身近な食問題を理解することで、自立した健康的な食生活ができるようになる。

3. 指導計画（計 3 時間）

学習内容	生徒の学びの姿
1．自分の食生活を振り返る（1時間）	・食習慣チェックリストを用いて自分の食生活を振り返り、問題点を把握する。 ・自分や身の回りでどんな食生活の問題があるかを考えてワークシートに記入する。
2．様々な食問題の把握と身近な問題の改善策を考える（1時間、本時）	・前回自分で考えた食問題について班ごとに情報を共有し、発表する。（復習） ・摂食障害について知る。DVD を見て班ごとにどのような問題があり、どんな改善策があるか考える。
3．まとめ 自分の食生活をよりよいものにする方法を考える（1時間）	・これまでの学習の中で知った食問題に対し、自分に起こり得る可能性がないか、危険度チェックリストを用いて確認する。 ・自分の食生活について再度振り返り、問題の改善策とよりよい食生活を送る方法を考える。

修正後

1. 題材名

「自分の食生活をよりよいものにしよう」

―身近に潜む食問題の理解と自分の食生活の改善―

B「食生活と自立」

(1)中学生の食生活と栄養

ア．自分の食生活に関心を持ち、生活の中で食事が果たす役割を理解し、健康に良い食習慣について考えること。

イ．栄養素の種類と働きを知り、中学生に必要な栄養の特徴について考えること。

2. 題材の指導目標

自分の食生活の振り返り、必要な栄養素・身近な食問題について理解することで、自立した健康的な食生活ができるようになる。

3. 指導計画（計 4 時間）

学習内容	生徒の学びの姿
1．中学生に必要な栄養素について理解する（1時間）	・成長期に必要な栄養素について、不足した場合に身長や体重、骨の形成、健康へどのような影響が出るのかを理解する。その上で、「どの栄養素が何のために必要なのか」ということに焦点を当てて栄養素を学習する。 ・必要な栄養素がどのような食べ物に含まれているかを理解する。
2．自分の食生活を振り返る（1時間）	・食習慣チェックリストを用いて自分の食生活を振り返り、問題点を把握する。 ・前時に学習した栄養素の不足の問題、または自分や身の回りでどんな食生活の問題があるかを考えてワークシートに記入する。
3．様々な食問題の把握と身近な問題の改善策を考える（1時間、本時）	・前回自分で考えた食問題について班ごとに情報を共有し、発表する。（復習） ・摂食障害について知る。DVD を見て班ごとにどのような問題があり、どんな改善策があるか考える。
4．まとめ 自分の食生活をよりよいものにする方法を考える（1時間）	・これまでの学習の中で知った食問題に対し、自分に起こり得る可能性がないか、危険度チェックリストを用いて確認する。 ・自分の食生活について再度振り返り、問題の改善策とよりよい食生活を送る方法を考える。

図4　学生Aが作成した指導案の変容

表6　リスクを学習題材として取り上げることについて

回答項目	回答数*	
	（人）	（%）
考えやすい	9	34.6
考えにくい	0	0.0
取り組みやすい	7	26.9
取り組みにくい	0	0.0
家庭科での題材として適当	10	38.5
家庭科での題材として不適当	0	0.0
わからない	0	0.0

*複数回答あり

みやすいものであり，題材として相応しいことが明らかになった。

また，結果には示さなかったが，リスクの分析において多角的に要因を分析することについては，「多角的に捉えることにより生活上の様々な要因があることを知った」，「リスクを深く理解できることを知った」，「様々な点から教えられるので教えやすい」との回答が多くみられた。さらに，定量的・定性的な分析の意義については，両分析を行うことで「教えやすくなる」，「生徒の理解が深まる」との回答が多くみられた。

4．考察

本研究では，家庭科の題材として生活の中のリスクを取り上げるにあたり，まず，教員養成課程の学生の食生活におけるリスクの捉え方の実態を明らかにした。リスクマネジメントプロセスの第1段階であるリスクの分析として，リスクの発見（同定）を行ったところ，学生が列挙した食生活におけるリスクの総数はのべ104件にのぼった（表1）。安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会（2004）は，現代社会にどのようなリスクがあるのかについてリスクを生じる問題領域を分類し（大分類），大分類ごとにさらに中分類，小分類，と整理している。大分類としては，①犯罪，②事故，③自然災害，④戦争，⑤サイバー空間の問題，⑥健康問題，⑦食品問題，⑧社会生活上の問題，⑨経済問題，⑩政治・行政の問題，⑪環境・エネルギー問題の11項目が挙げられ，小分類には相当に具体的なリスク事象が示されている。このうちの②事故，⑥健康問題，⑦食品問題，⑪環境・エネルギー問題に食生活に関連するリスクが該当している。小分類の詳細と照らし合わせると，学生が列挙したリスクのうち，火事やケガは②事故に，生活習慣病や肥満，アレルギー，中毒などの病気に関する問題は⑥健康問題に分類されている。また，⑦食品問題に異物混入や食中毒，産地表示が，⑪環境・エネルギー問題に地球温暖化，食料問題が分類されている。しかし，表1のリスク項目には，この分類には当てはめにくいリスクもいくつかみられた。

食品リスクのみを整理した分類では，中谷（2007）は人間が摂食行動を通して生活を営んでいる過程では，①栄養面での健康リスク，②食品危害因子によるリスクが生じる，としている。また，嘉田（2008）は，高度成長を遂げ，グローバル化のなか食のやりとりが行われる現代社会に生じるマイナスの影響には，①栄養の偏り，②新たな食品リスク，③環境負荷の増大がある，と指摘している。表１の学生が列挙したリスク項目には，やはりこれらの分類にも当てはめにくいリスクがみられた。例えば，表1において学生Ｉが列挙した「テーブルマナーを知らない」というリスク項目は，一見してリスクとは捉えがたい項目である。学生Iが記載したリスクの内容には，「上司や先輩と食事をした際にテーブルマナーを知らずに好ましくない態度や行動を取ってしまうと，人間関係に問題が生じる」とあり，食生活における振る舞いが人間関係の崩壊という広い意味での生活のリスクと成り得ると考えていた。このように，リスクは生活のいろいろな側面から考えられること，リスクの項目や程度は１人の人間として性別や年代，置かれている環境によっても異なること等から，リスクの捉え方も様々である。したがって，家庭科の授業の中で生徒にリスクを考えさせ，リスク分析を行う際には，リスクに遭遇する対象や状況をある程度整理して考えさせ，指導することが必要ではないかと思われる。リスクはいつ起こるのか，どれくらいの起こりやすさで起こるか，どのくらいの大きさで起こるか，そもそも起こるのかさえも分からない不確実性をもっているため，客観的な評価が難しく，また人間が認識する場合に正しく理解されないという問題があることも指摘されている（奈良2011）。家庭科の授業の中で，さまざまなリスクに対する見方や考え方を調整・統合しながら，リスク回避や軽減の方策を探ることがリスクマネジメントの基礎になると考えられる。

家庭科の学習題材としてリスクを取り上げることについては，学生にとって授業構想を考えやすく取り組みやすいものであり，題材として相応しいことが明らかになった（表6）。リスクの情報源として多く挙がっていた「テレビ」，「授業」，「経験した」

等を通して，リスクは日常生活において学生にとっても身近な話題であることがわかった。しかし，それ故に，当初は学生自身のリスクへの興味と理解が優先され，教師として生徒にどう伝えるかの意識が不足していることが窺えた。しかし，講義全体を通して，まず，学生のリスクについて考える力と分析・整理する力が付き，それに伴って生活の中に潜むリスクについての認識が変わっていき，その後，教える立場で正しい知識を持ってリスク問題を扱い生徒の理解を目指そうとする変容の過程がみられた。

中学校学習指導要領（技術・家庭編）において，「指導計画の作成と内容の取扱い」の中に，実習の指導における安全管理や安全指導について明記されており，施設・設備の安全管理に配慮し，事故防止のための指導を行い，安全と衛生に十分留意しなければならないこと，さらに，事故発生時の対応策等を綿密に計画しておくことが指導者として求められている。そして，次期中学校学習指導要領（第8節 技術・家庭）においては，「調理実習については，食物アレルギーにも配慮するものとする」との記載が新たに加わっている。このように，家庭科教員の資質として安全管理や安全指導ができることが必須であり，学生が中等家庭科教育法の講義の中でリスクとリスクマネジメントについて考えたことが即役立つものと推察される。

また，次期中学校学習指導要領（第8節 技術・家庭）の家庭分野の目標において，「(2)家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだして課題を設定し，解決策を構想し，実践を評価・改善し，考察したことを論理的に表現するなど，これからの生活を展望して課題を解決する力を養う。」と明記されているが，リスクを題材にした授業はこの目標に合致した内容と言える。すなわち，生活の中の問題（リスク）を見いだし，課題設定，解決策の構想，実践の評価・改善のプロセス（リスクマネジメント）を通して，これからの生活を展望して課題を解決する力が養われることに繋がる。

生活におけるリスクマネジメントの目的は，生活の安全・安心を確保することによって生活のより良さを実現することである。家庭科教育によって，生徒に主体的・計画的なリスクマネジメントを実行できる力が付けば，生徒１人１人が個人の状況に応じてリスクと向き合い，主体的により良い暮らしを実現することが可能となる。これまで家庭科の授業において，リスクとベネフィット（利便性）の視点から授業が展開されることは多くみられたが，今後は，防災教育を初めとして，リスクとリスクマネジメントの視点でも授業が展開されることが望まれる。

５．まとめ

本研究では，日常生活におけるリスクを教科専門内容から捉え，リスクマネジメントの観点から指導できる家庭科教員の養成を目指して，教員養成課程の学生の食生活におけるリスクの捉え方の実態を明らかにするとともに，授業構想の過程でみられた学生のリスクに対する考え方の変容と課題について検討した。そのなかで，食生活におけるリスクは学生にとって，自身の経験やテレビ等の情報に触れることで身近な問題であり，家庭科の学習題材としても相応しいことがわかった。中等家庭科教育法の講義全体を通して，学生のリスクについて考える力と分析・整理する力が付き，その後，教える立場で正しい知識を持ってリスクを扱い，生徒の理解を目指そうとする変容がみられた。また，授業構想の過程で，学習指導要領に即して指導する工夫や生徒の立場での考え方が導入されていた。家庭科教員の資質として安全管理や安全指導ができることは必須であり，リスクとリスクマネジメントについて考えることは教員として大いに役立つものと期待される。

参考文献

安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会:「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会」報告書, pp.22-24 (2004)

嘉田良平:『食品の安全性を考える　改訂版』，放送大学教育振興会 (2008)

高木幸子, 山口智子, 中村和吉, 高橋桂子, 杉村桃子, 飯野由香利：家庭科教員養成における教科専門と教科教育の連携－教科教育法における連携の試みと学習成果の事例検討－, 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 6 (1), 99-107 (2013)

高木幸子，中村和吉，飯野由香利，山口智子，杉村桃子：家庭科教員養成において教科指導の力をつけるプログラムの検討，新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 9 (2), 283-292 (2017)

中谷延二：食生活とリスク，奈良由美子編著『生活とリスク』, pp.135-151, 放送大学教育振興会 (2007)

奈良由美子：『生活リスクマネジメント』，放送大学教育振興会 (2011)

文部科学省：中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編，pp.49-57, 80-81, 教育図書株式会社 (2008)

文部科学省：中学校学習指導要領，pp.121-128,
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/
education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/
2017/06/21/1384661_5.pdf (2017.6.23)